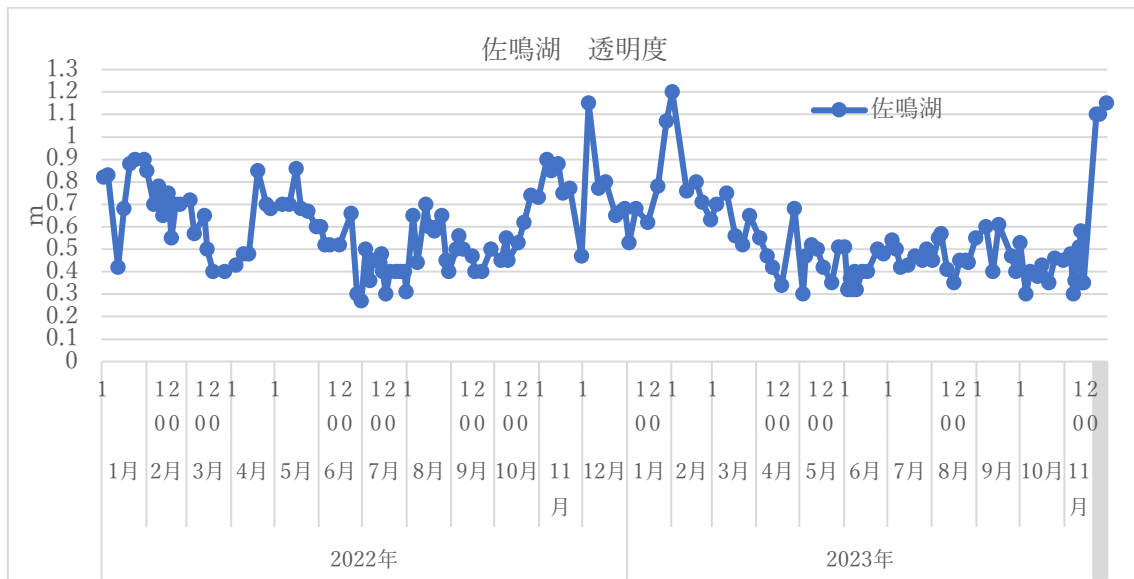


## 佐鳴湖の透明度



透明度版 (手製)



8月18日



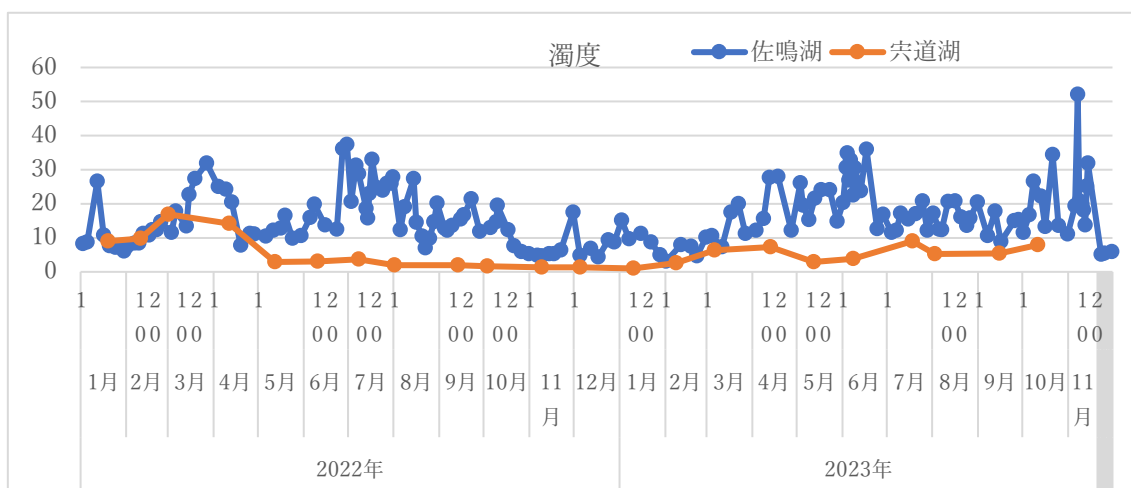
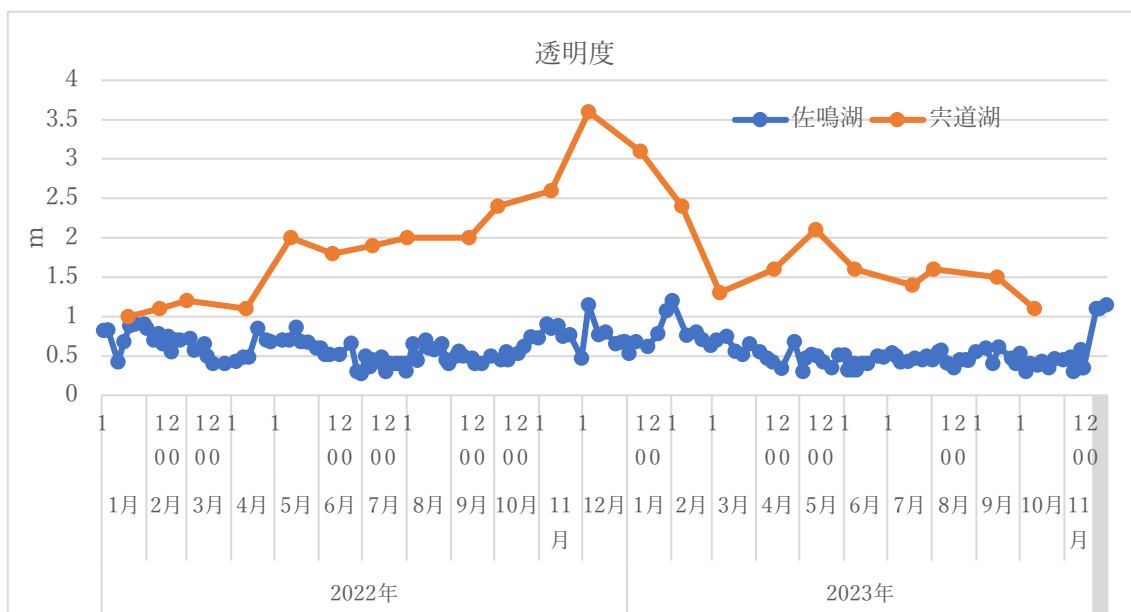
ろ過したろ紙 (懸濁物が多い)



12月4日 透明度0.8m きれいに見える ろ過したろ紙 (懸濁物が少ない)

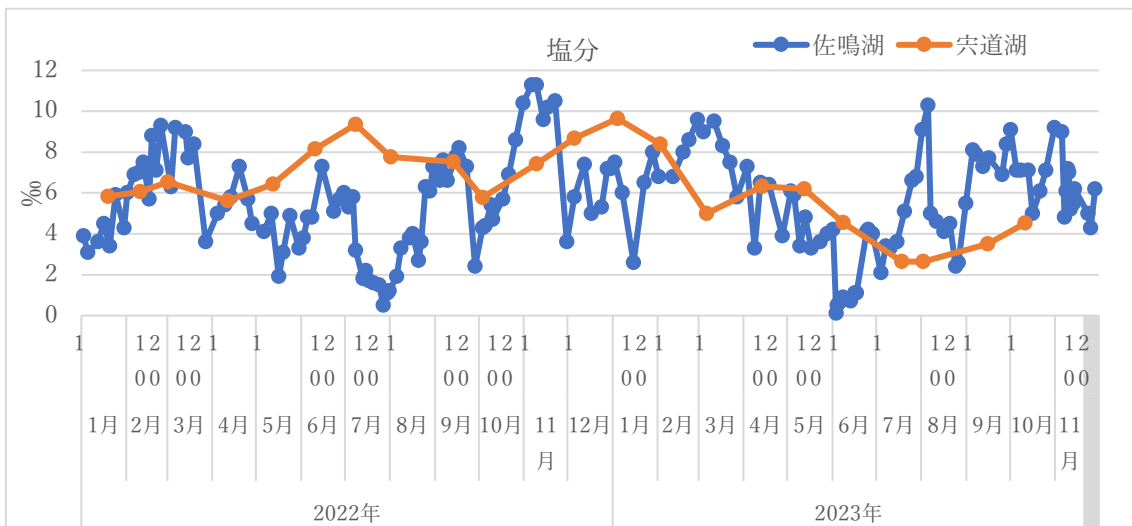
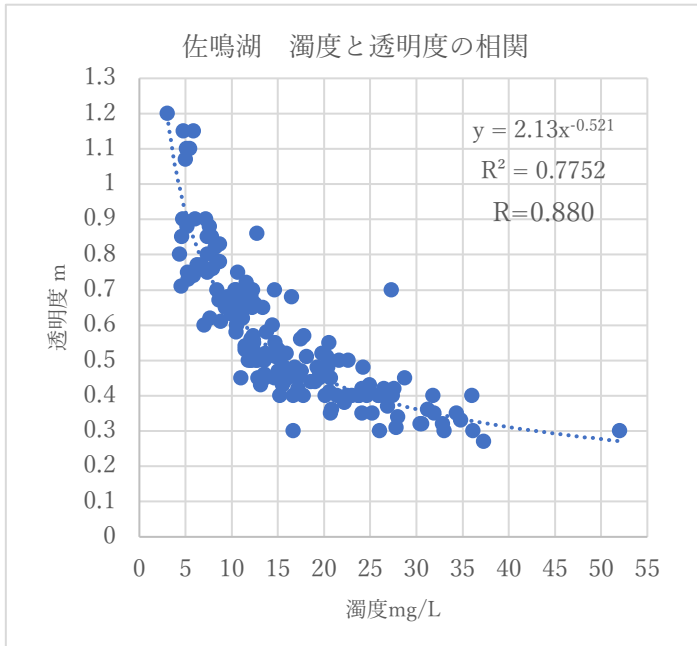
11月～12月にかけて1年間の中で透明度は最も大きく約1.0mになる。初夏から晩秋にかけては0.4～0.5mで濁り、水色は淡黄緑色である。12月は夏の優占種である藍藻から冬の優占種である珪藻と渦鞭毛藻に替わる時期で、その交替の時期にプランクトンが少なくなり、懸濁物が少なく透明度が高くなり、きれいに見える。主役が交代する時期である。

ヤマトシジミで有名な宍道湖と比べると、宍道湖の最も低い値が1.0mであり、佐鳴湖が  
 いかにも濁った状態であるかがわかる。佐鳴湖の夏の透明度の目標は約0.7mと考  
 えている。その理由は、透明度0.7mは佐鳴湖の底層(約2.0m)まで光が届き光合成  
 が行われる生産層になるからである。現在の佐鳴湖の下層は分解層で有機物  
 は専ら分解され窒素、リンの栄養塩が生産されている。



濁度は水の濁りの指標で、宍道湖では5.0以下の時が多く、水中に懸濁物質が少なく、透明  
 度も大きくなるのである。佐鳴湖の濁度は冬を除き10以上の時が多く、特に初夏から秋に  
 かけて20以上にもなり、高水温と高濁度が重なる夏にヤマトシジミはへい死する。  
 濁度が高くなる理由は、夏の藍藻の遺骸に粘土などが付着し懸濁物質となり、水中に浮遊す  
 るためと考えられる。濁度の低下(10)が課題である。  
 湖水の排出機能が上がれば、水の入替わりが速くなり、濁度は低下し透明度は高くなるこ

とが期待できる。地下水の活用を考えている。



塩分は佐鳴湖、穴道湖ほぼ同じ、ヤマトシジミに適性塩分である。

穴道湖は海水に近い中海がすぐ近くにあり、佐鳴湖は浜名湖から約 5.0km 離れており、湖水は出たり入ったりを繰り返し、湖内での栄養塩の供給（プランクトン遺骸の分解による栄養塩の発生）が常にある、プランクトンが増殖しやすい環境となっている。